

7/11/4/28

初期大和王権 巨大建物跡か

奈良・纏向遺跡

女王・卑弥呼が治めた邪馬台国の有力候補地とされる奈良県桜井市の纏向遺跡（2世紀末〜4世紀初め）

で、3世紀前半としては国内最大の大型建物跡のすぐ東側から、3世紀後半以降の建物跡の可能性がある柱穴列が見つかった。写真、

市教委提供。市教委は「初期大和王権の中心的な建物だった可能性もある」とみている。

南北約9メートルの直線上に2種類の大きさの穴が交互に五つ並んでいた。長方形の穴（東西約1・2メートル、南北約60センチ）が4・5メートル間隔で

三つ、一回り小さい方形の穴（約60センチ四方）が二つ見つかった。柱間を支える東柱を持った巨大建物跡とみられるという。

2009年11月、今回見つかった柱穴列の約5メートルで大型建物跡（南北19・2メートル、東西12・4メートル）が確認されている。今回の場所から3世紀後半〜4世紀の土器片が多数出土したことから、この時代に造られた可能性が高いとみている。

石野博信・兵庫県立考古博物館長（考古学）は「同じ場所に継続して巨大建物造られ、邪馬台国が初期大和王権へと引き継がれた可能性もある」とみる。

現地はすでに埋め戻され、出土した土器や写真などを展示する速報展が10月2日まで、同市芝の市立埋蔵文化財センター（0744・42・6005）で開かれている。写真（渡義人）



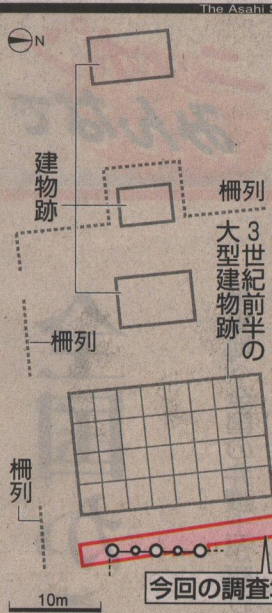
纏向遺跡

東西約2キロ、南北約1・5キロの大規模集落遺跡で、250年ごろに死去した卑弥呼の墓との説がある箸墓（はしはか）古墳（3世紀中ごろ〜後半、全長約280メートル）など最古級の前方後円墳が点在する。全国各地の土器が出土し、運河が縦横に走るなど都市機能を備えていたとみられる。



The Asahi Shimbun

纏向遺跡で出土した建物跡の位置関係図



柵列
3世紀前半の
大型建物跡

建物跡

柵列

柵列

今回の調査地

10m

大和政権の重要施設か

纏向遺跡 新たな大型建物跡

邪馬台国の最有力候補地とされる纏向遺跡（奈良県桜井市）で、「卑弥呼の居館」とも指摘された大型建物跡（3世紀前半）の約5分の1部が見つかり、同市教委が27日、発表した。建物跡は造営年代が3世紀後半以降と判明。今後、造営年代が遺跡が存続した4世紀前半までの間に特定されれば、初期大和政権の重要施設だった可能性が高まるという。

見つかったのは南北に5つ並び柱穴で、長さは9メートル。周辺調査から南端の柱穴は建物の南西隅と判明し、柱穴は建物の西面にあたる。

柱穴の大きさは隣の大型建物跡とほぼ同じ大きさで、柱穴列もさらに北に延びる可能性が高く、大規模な建物だったとみられる。

ただ、建物跡の大部分はすぐ東側を通るJR桜井線の線路下に埋まっており、建物の規模や造営年代の特定は難しいという。

現場は埋め戻され、現地説明会はないが、27日に同市立埋蔵文化財センター（桜井市芝）で始まった速報展「50cm下の桜井」で、今回の調査で見つかった土器などの遺物や、昨年調査で大量に出土したモモの種などが展示されている。



発見された3世紀後半以降の建物の柱穴。建物跡の大部分は線路の下に隠れているという—奈良県桜井市の纏向遺跡（同市教委提供）